普段着のわたしたち

平和公園の墓地に謎の「つた」が伸びてきました。正体は「葛」です。とんでもない成長力です。切っても切っても伸びてきます。根っこがどこにあるのか、わかりません。

対処療法で、墓地内に伸びてきた葛を切っていますが、しばらくするとまた伸びています。葛の伸び方は凄いですね。

征阿

先日、カインズで特価になっていた「お一人様用焼き鳥コンロ」を衝動買いしました。買って数日毎日焼き鳥でした。一番の好物は砂肝（というか、砂肝ばっかりでいいです）。

これからの時期、焼き鳥に限らず、温めなおしにも重宝しそうです。右端のフランクフルトは息子のです。

訶梨帝母

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。

もちろんスマホ対応もしていますので、眼の良い方はお試しください。

寺務局

どう間違ったのか、この秋の我が宗派の役員改正選挙で、私が宗務総長になりました。そして財務部長に迷走坊さんを任命しました。

就任早々、私は関東別院へは行かず、この夏に閉園した「としまえん」へ行ってメリーゴーランドを買ってくる！金出せ！とわめき立て、そんな私を迷走坊部長が必死に迷走し追いかけ引き止め、あげく京都駅で新幹線車内から引きずり降ろされるという全く楽しい夢をみました。

落札したメリーゴーランドはご本山の御影堂前に移設。そのお馬さん、馬車等には二十五菩薩さまが既にご乗車です。法然上人立教開宗の御像は少し横に移動していただき改札入口へ。ベルが鳴り音楽と共にきらびやかに極楽浄土への楽しい旅の始まりです。お地蔵さんが手を振ってお見送りです。法然さまに「極楽行き」の切符を切ってもらえるなんて素敵です！

（※後半は二度寝の夢です）

俊徳丸

非接触型体温計を買いました。真っ先に俊徳丸さんの熱を測ろうと思いましてね。ただ、中国製ですので、彼の額の前へ近づけた途端に発火するのではと心配しています。普通の人なら何も問題はないでしょう。（笑）

迷走坊

こもりうた70

コロナ騒ぎ、慣れてきたのか警戒が鈍ってきたのか、人々が街や観光地に増え始めています。「GoToキャンペーン」も拍車をかけているのでしょう。個人的には「旅行するなら外国人観光客のいない今がチャンス！」と少し思ったりもしています。そんな中、観光客が戻りつつある奈良の現状をニュース番組で見ました。内容は「奈良公園の鹿、鹿せんべいにそっぽ向く」です。

奈良公園の鹿は、飼育されているわけでなく（保護団体に管理はされている）ほぼ野生。鹿舎があるわけでなく、定期的に餌を与えられる事もなく、公園内や草原の草を食べ、夜になれば森へ帰って寝る生活。ですから、観光客がホイホイとくれる「鹿せんべい」は、日中、小腹が空いた時に安易に食べられる格好の昼食だった事でしょう。ところが、年明け間もなくのコロナ禍で観光客は激減。すっかり「ランチの鹿せんべい」にありつけなくなった彼らは、本来の「自然採食」に専念。その結果、やっぱり草が美味しいわ～と思ったかどうかは定かでありませんが、「鹿せんべい」を食べなくなったのだそうです。映像でも、観光客が口元に「鹿せんべい」を近づけても、顔を背けるシーンがありました。

北海道大学研究グループと「奈良の鹿愛護会」の調査によると、観光客減少で「鹿せんべい依存」から離脱、周辺の森や山で「自然採食」をする時間の増加、奈良公園中心部に出てくる鹿が減少、人間との接触によるストレス低下と休息時間の増加。それらにより、野**生に近づく（戻る）ことで栄養状態**良好、出産率向上も期待されるなど、国の天然記念物に指定されている「奈良のシカ」にとっては良いことであるし、必要なこと、なのだそうです。

と言われると、そうには違いないのですが、少し残念で寂しく感じてしまうのは私のエゴイズム。

今年早春、まだ「緊急事態宣言」発令前の出来事。奈良公園の鹿がお腹を空かせていると聞き、息子に「鹿さんにせんべいをあげに行こう」と言い出かけました。当時はまだ「せんべい依存症」の鹿が多く（計算上、一頭当たり日に60枚以上食べていたとか）販売所で買っている時点で熱い視線を感じ、振り向きざまに取り囲まれ襲われる状態。息子は恐れおののき、せんべいをばらまいて鹿から逃げる始末。それでも公園内をぐるりと周り大佛様をお参りしたあとは少し慣れてきて、再びせんべいを与えることに興じていました。時々「また鹿のところに行きたい」と言うのですが、次に行ってそっぽ向かれたらさぞやがっかりするだろうと思うので、理屈がわかるようになるまでお預けです。

それにつけても、日に60枚とは食べ過ぎ（いや、与え過ぎ、売り過ぎ）でしょうに。

訶梨帝母

銀杏のおはなし

※写真は、あくまでもイメージです

今秋…『オッサンＡとＢの会話』

Ⓐ「朝の俊徳丸和尚の法螺貝、へたくそでかなわんなぁ～」Ⓑ「朝からやる気なくしますわ」Ⓐ「しかしな、秋からお寺の銀杏を食べているせいで、吹くと法螺貝から炎が噴き出すようになったらしいよ！」Ⓑ「嘘や！そんな効き目あるんやったら拾いにいかんと！」Ⓐ「ヘルメットかぶって行きや、パワーがありすぎて実が隕石のように落ちてくるそうや。昨日も一人気絶しとったわ」…　とデマを拡散してみました。

ウチのお寺の銀杏の木は樹齢推定450年の大木で、『養生の木』と呼ばれています。我が町の保護樹第１号に指定され、町がインターネットで初めてホームページを開設した際の表紙を飾った木で、拙寺の歴史を見守り続けてきました。また木下にある檀家さんの墓地を雨や夏の強い日差しから遮る涼しげな木陰を作り小鳥たちの眠りの場となっています。元来、更地に神社やお寺を建立する際は銀杏の木を３本並べて植えたそうです。近くで火災があった時には、燃えにくい葉ゆえに類焼から守ってくれるからです。半面その落ち葉を掃除する時には他の葉より重いし燃えにくいし大変難儀します。また大風から建物を守ってくれます。拙寺でも平成５年６月に竜巻に襲われました。夕方の一瞬の出来事です。あっという間に真っ暗になり、それまで経験したことがない怒り狂った風で物凄い音だったのを忘れません。本堂の鬼瓦だけが跡形もなく破損し、多くの銀杏の枝が折れ落ちていました。まるで銀杏が仁王立ちになってお寺を守ってくれたのだとわかりました。今でも私は、昼間に近くを台風が通過する際は必ず銀杏の近くに行き見上げてその様子をよく観察することにしています。そうすると、私が抱いていた竜巻の時のイメージとは全く違い、銀杏は強風に全く抵抗することなく、金メダリスト荒川静香がイナバウワーをしているがごとく大風に耐え美しくしなって守ってくれています。銀杏のボディーはもろいようで大変弾力性のある特質の木であることがわかります。よく落ち葉の掃除が大変だからという理由で銀杏を伐採してしまう住職がおいでですが、あれは愚かな行為だとしか言えません。

拙寺の銀杏も過去伐採の危機が２回ありました。明治 20 年国鉄東海道本線建設のため３本の内２本が伐採されました。残った１本が現在の銀杏です。奥三河の木こり職人さん８名で伐採したそうです。その木をすぐに碁盤屋に売り飛ばしたせいで全員が瞬く間に命を落とし境内の墓地に無縁佛としてお祀りしています。現在も「にごり酒」をお供えします。２回目は、戦争中岐阜にはゼロ戦の飛行場『現在の航空自衛隊岐阜基地』があり、そこを攻撃するため伊勢湾から侵入したアメリカ軍機の地図に銀杏が載っていることで伐採されそうになりました。そんな話を聞きながら祖母と黄色くなった実を拾ったものです。　　俊徳丸

『私説法然伝』（７０）

往生する人たち⑥

先月号では法然上人が平重衡に授戒をされた事について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【法然上人のされた「真似」とは今日では我々僧侶が葬儀で行う「授戒（じゅかい）」と同じである。本来剃刀をあてるという事は髪の毛を剃り落として出家するという事であるが、法然上人は「真似」だけをされたのである。これが非常に「戒文」の中で目を引く一節となっている。本願念佛の教えの一節は法然上人の直接のお言葉というよりも、後代にまとめられ練られた文体の印象があるが、重衡に授戒をされた一文だけは生々しい。後代に法然上人のご威徳を語り継ぐという「目的」があるのならば、本願念佛の教えを説かれた一節を重視して文章を練りに練るというのは自然な事であるが、授戒に関してはさほど何か手を加えたという印象もない。しかしわざわざ付け加えたという理由も考えられない。おそらくは史実か伝承があったからこそ、記述されているのであろう。そうだとすれば法然上人がなぜ重衡に授戒の「真似」をされたのか？単に重衡を安心させるためだけなのか？それとも何かしらの意図があったのか？

真相は法然上人にしかわからない事だが、今日の我々の葬儀における「おかみそり」の作法から逆算的に考えていくと、法然上人にとっての授戒、つまり戒というものをどう捉えるのかという点が浮かび上がる。

「真似」という事は、髪の毛を剃る事にこだわらないという事であろう。法然上人の他のお言葉にもあるように、本願念佛という「他力」の教えである以上は自分が戒を守ろうが守れなかろうが、関係ないのである。あくまで法蔵菩薩が悟りを得る為に我々は救われるのである。阿弥陀如来が現に彼の国にまします以上は、我々は救われてしまっているのである。だから戒を守る守らないは関係ないのだ。それが本願念佛というものであって、そこで法然上人が重衡に授戒されたのは「生き方」を示されたかったからではないだろうか？重衡は「死後」を考えていた。だが本願念佛は「死後」の答えを「救われている」という結果論で示している。重衡が本当に知りたかった事は結果なのだろうか？そうではないと法然上人は見抜かれたのだろう。だから授戒をされた。授戒とは生き方を示すものである。どう生きるべきかが授戒であり、重衡というおそらく殺されるであろう者へ法然上人は生き方を示されたのだ。だからこそ重衡も深く感じ入ったのではないだろうか？】

以下次号に続く（征阿）

一期一会

1973 年８月９日午後４時を少し過ぎた頃、９人の日本の若者がフィンランドの首都ヘルシンキの中央駅に降り立ちました。

当時、シベリア経由でヨーロッパへ行く旅は結構人気がありました。横浜港から船でナホトカ迄２日間。夜行列車でハバロフスクへ 16 時間。次いでジェット機でモスクワ迄９時間飛んだ後、２日間滞在し、また夜行列車で 15 時間かけてヘルシンキへ到着したのです。

小田実が『何でも見てやろう』を書き、触発された若者が片道切符だけを買ってアテもなく一人で気ままに巡る世界の旅へ跳び出して行った、そんな時代でした。

最初の宿泊先であるユースホステルの広間でキョロキョロしていると、１人の日本人から話しかけられました。バックパッカー初心者と判ったのでしょう。

彼は、２年前に９人と同じ行程で日本から来て、今度は同じルートを反対に辿って日本へ帰るところでした。彼はこう語ったのです、

「僕は、２年前にここでイギリス人と出会いました。話をしようとしたけど、彼の言うことが全然理解できなかったんです。そんな僕を見て、彼が言ったのは『君はヨーロッパへ来るのが２年早かった。２年かけて英語の基礎を勉強してから来れば、いろんな人と話ができて、たくさんのことを学べたはずだ』それ迄一言も解らなかったのに、不思議とその言葉だけは全部入ってきたんです。それで、直ぐイギリスへ行って１年間英語研修を受けてからヨーロッパを一周して、今、日本へ帰るところなんです」。

やれやれ、中学生から英語の授業を何年受けたことか。読み書き偏重でちっとも話せやしない。海外へ来ているのに何と吸収することが少ない旅行か。国籍も年齢も職業も違う人々が集まって同じ言語を学ぶ学校ってどんな雰囲気なんだろう。自分の目で見てみたい。翌日、８人は真直ぐロンドンを目指しました。

１人だけ、へそとつむじが曲がった奴がいました。日本でフランス語を齧っていましたので、パリで語学学校へ通ったのです。「人の行く裏に道あり花の山」欧米では「リッチマンになりたければ孤独に耐えろ」と教えています。この判断は彼の進路を決定づけました。後に

この学校の大阪校と深く関わることになるのですが、当時は想像もしていませんでした。

一期一会という言葉があります。９人にとっては正にこの言葉通りの出会いでした。

一期とは佛教語で、人間が生まれてから死ぬまでのこと。一期一会とは、一生に一度だけ、生涯に一度限りという意味です。「人と人との出会いは一度限りの大切なもの」という意味で使われたり、「生涯に一回しかないと考えて専念する」という意味で使われています。人には優しくありたいものです。　迷走坊

続・観経物語（１７）

観経要讃（十六）

観音菩薩は慈悲を持ち
五道の塵に交わりて
徳を施し諸人を
弥陀の御國に送るなり

今回は第十の観音菩薩を観想する方法の章段になります。関本諦承師の観経要讃では、観音菩薩の色相（＝身体の様子）を観察する方法として受け止めるのではなく、あくまで、その作用（＝働きかけ）を見ていこうとされています。始めに、「観音菩薩は慈悲を持ち」とは観経のどこに説かれているのでしょう。観経では最初に観音菩薩の身体の大きさ（＝身相）、面相などをつぶさに説いたあと、臂そして手と説き進め、「手掌は五百億の雑蓮華の色を作す。手に十指の端（＝指先）あり。一一の指の端は、八万四千の画（＝絵模様）有りて～八万四千の光有り。其の光は柔軟にして普ねく一切を照らす。此の宝手を以て、衆生を接引す。」とあり、観音菩薩の手の相がまさしく慈悲を説き現していると読み解くとともに、その宝手から放たれる光は五道（＝天道、人間道、畜生道、餓鬼道、地獄道の、悪業の塵に混みれた迷いの世界）を照らし、観音菩薩の阿弥陀佛と同等の摂衆生の働きがあり有縁の人々を引接する働きがあることを導き出されました。次に、観音菩薩が五道に現出されて、衆生の世界で人々に、利益を施す有り様を観経の「足を挙ぐる時、足下に千輻輪（＝千の輻[や]）の相有り、自然に化して五百億の光明の台に成す。足を下ろす時、金剛摩尼（＝ダイヤモンドや美しき宝石）の華有り。一切に布散し、弥満せざるは莫し。」とある足の相の特色を言う文言から、足の相が観音菩薩の徳を表すことを讃えられて、その徳は普ねく一切にめぐらされ、ゆきわたらないところはなく、諸人を救う働きを示すのです。それによって慈悲と徳という化益を我々に強調せられたのです。また、観音菩薩足の相の働きの化益を蒙る人と、観音菩薩をつぶさに観察する人とは、阿弥陀佛の身相を観るに等しいと言う観経の意図を「諸人を弥陀の御国に送るなり」という言葉で端的に表現しておられます。ところで観音菩薩と阿弥陀佛が「同等」と言えるのはどうしてなのか。観経では「（この菩薩には）その余の身相（身体の特長）・衆好（あらゆる美点）具足し（備えていて）て、佛（＝阿弥陀佛）のことごとく異なることなし。ただ頂上の肉髻（＝髻の形をした肉の隆起）および無見（＝誰も見たことがない）頂の相のみ世尊（＝阿弥陀佛）に及ばず。」とあることに根拠があります。　《妙星斎》